

かつて、2000年の第1回「大地の芸術祭」の基本理念は越後妻有の環境と市民生活の調和であったと記憶しています。弊社リジオナル・プランニング・チーム（RPT）はそのためにこの地域の環境調査を担当致しました。その結果、この大地は信濃川が長い時間をかけて開削したことなどが判明しました。そうしたエコロジカル評価の結果をもとに、かつての信濃川が蛇行していた川筋をポール680本で具体的に表示したのが2000年に発表した『川はどこへいった』という作品です。それはたとえ地形が変わっても川は元の流形を記憶しているという、自然生態系の持つ強靱な原理原則を示したものでした。

「ポールに黄色い旗をつければ、山風・海風の朝晩の方向の違いが見られる」など、具体的な表現方法についてアドバイスして下さったのが地元の測量士／米農家の南雲昇氏でした。その時のことが今でも鮮明に記憶に残っています。同作品の第1回住民説明会の参加者は7～8名でした。ところが実作業用に準備した1／500の図面を提示したところ、さあ大変なことになりました。そこには「誰々のたんぼのどこに何本のポールが立つのか」といったことが明記されているのです。計画反対の大合唱となりました。

今思えば、あの成田空港反対闘争を彷彿とさせる様相となってしまったのです。南雲氏のご協力もあり、芸術祭終了後には必ず原状回復することをお約束し、作品制作は実現しました。しかし、県外からやって来る農業にまったく関心のない観光客を稲の花が咲くたんぼに立ち入ることは絶対禁止とされ、地域住民の皆さんはたんぼのあぜ道に並んで“外敵を監視”するという皮肉な“住民参加”となったのです。

この時の教訓から、「いかなる理由があろうと原状回復すること」が必携条件であるという地元の皆さんとのお約束が、近年、反故になってきているのではないかということが大変気になっております。近年の“芸術祭”では、コンクリート建造物、プラスチック・金属片の残存が目立ってきているようです。つまり、2000年に弊社が現・十日町市、津南町の皆さんと交わしたお約束とはまったく異なる様相を見せているようです。美しい越後妻有の大地がこれからどのように変わっていくのか、心配しております。

そこで思い起こされるのが、旧松代町の小貫集落の閉村に至る事情です。この点については現地に建立されている『小貫閉村之碑（小山直治氏建立）』に多くが刻まれております。様々な事情があって閉村に至っているのですが、村民の皆さんの無念さを見て取るのは決して私だけではないはずです。

また、ここから数百メートル先の丘に面して一文字碑『慈』が建立されており、「先人が拓いたこの土地を守ってください」という「ねがい」が碑文に残されています。

実はこの碑の建立関係者のおひとりからお礼のお便りを芸術祭実行委員会を通して頂戴しました。これは私にとって初めての経験であり、病身の身でありながら、現場の様子をご覧頂いたことに心より感謝しております。

一方、旧十日町市・飛渡の小貫集落には、かつて中学時代までこの地に住んでおられた庭野三省さん、庭野武一さんがご健在で、現場を訪ねて来る人々に丁寧な案内をして下さいました。ここに住んでおられた方々、あるいは近隣地域に移住された方々に、往時やその後の様子を詳細に説明して下さいました。

おふたりの旧小貫に関する記憶は単なる思い出にとどまることなく、小貫村の楽しく美しい往時の夢と今後の希望を語っていることは傍で拝見してよくわかりました。庭野三省さんは“廃村”という言葉を嫌い、今でも「休村」「閉村」とおっしゃっています。

おふたりは現地を訪ねて来た県外各地からの旧村民、関係者の皆さんからのノートへの感謝文、メールをまとめて下さり、それは貴重な記録となっております。また、地元にお住まいの日本民俗学会会員・松本三喜夫先生の『生命（いのち）のケハイ』と題する十日町タイムス紙への批評文も的確で愛情に満ちた名論であったと思っています。

さらに、津南町には『外丸郷土史』（昭和31年、恩田倬編纂）があり、ここに昭和31年以降の町史がすべて残されています。現在ではこれに地形図、高山植物図と地質図が添付されており、そこには第三期層、火山岩、第四期層、河川の分布が記録されています。

現在では一般化されているエコ・マップが昭和31年当時、この地に存在していたことは特筆に値します。私たちはこの昭和時代のエコ・マップにヒントを受け、地すべり図、土石流痕跡図、傾斜図等を追加制作しました。

この地は清津川や中津川が開削してきた清津峡、中津峡といった貴重な地質資源、河川資源、温泉資源等に恵まれた地域であることがよく知られています。さらに、2011年3月12日の長野県北部地震に伴い土石流が発生した辰の口は危険箇所として新潟県の管理下に置かれているほか、付近の船繋川沿いはこの地域で最も風の強い沢筋としても知られており、十分な注意が必要です。

さて、越後妻有の皆さんからは今後の課題をたくさん頂きました。

もうそろそろ、“現代アート（d'Art Contemporain）”といった欧米流のレトリックから脱脚し、私たち自身の方策を真剣に模索する時代がきていると思っています。そのヒントを、この20年余りの間にこの地で体験させて頂いたことから教えられたというべきでしょうか。

越後妻有の皆さん、本当にありがとうございました。